

『週刊新潮』で好評連載中の中家会長のコラム「ピンチをチャンスに!」の第29回(3月28日号)、第30回(4月4日号)掲載分は、『月刊JA』のHPからもご覧いただけます。

中家会長 3月定例会見 会長からのメッセージ

中家会長は3月8日、通常総会終了後、定例会見を行いました。「9月30日の全中の組織変更(一般社団法人化)に関して、これまで地区別組合長会議や正副会長の全県訪問などで議論を重ねてきましたが、通常総会で正式に承認をいただきました。組織形態は変わりますが、JAグループの代表として、総合調整や相談などJAから求められる役割を果たして、従来にも増して存在価値のある組織になってまいりたい」と冒頭のあいさつを述べました。

3月7日、「第28回JA全国大会」を開催しました。今回は今までと異なり先に都道府県の大会を行うことで、地域の独自色を出すことができました。

「自己改革の実践」では、それぞれのJAの現場で一生懸命に取り組んでいくことで、優良事例の横展開を行い全体的な底上げができています。生産資材価格の低減や農畜産物の取扱高の拡大など自己改革の成果を具体的な数値で「見える化」ができました。今後とも組合員、地域住民にとってなくてはならない組織であり続けるため大会決議を踏まえて「自己改革の実践」を続けていきます。

通常総会では「食料安全保障を柱とする基本政策の確立に向

けた特別決議」を行いました。食料を取り巻く情勢は厳しく、食料自給率は過去最低水準にあり、高齢化による生産基盤弱体化など自給力低下が続いています。次期食料・農業・農村基本計画の見直し議論が今後始まりますが、農の多面的機能や食の危機的状況が一般的に知られていないと日々、感じています。あらゆる機会を捉えて、国民、消費者の皆さんに「農業・農村を支えたい」と思っただけ環境づくりに取り組んでまいりたい。そのためにも学校教育の教科の中に「食農」があってもいいと思っています。

会長メッセージはJAグループのウェブサイト (<https://org.ja-group.jp/message>) に掲載しています。

JAと生産者の戦略と奮闘を伝える 『日経ビジネス』で4号連続掲載

日頃、あまり農業と接点のないビジネスパーソンに向けて、JAが「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」に貢献している「現場」を紹介するため『日経ビジネス』2月25日号から4号連続で「JAが創るニッポンの農」を掲載しました。JAが創意工夫することで農業現場にイノベーションをもたらすことをビジネス誌の視点から捉えました。

第1回は、市場ニーズを「未来予測」したことで、窮地からV字回復したJA中野市(長野県)のぶどう販売の戦略。第2回(3月4日号)は、JA道央(北海道)と製パンメーカーの連携による小麦



「ゆめちから」の需要創造。第3回(3月11日号)は、6次産業化や他県JAとの連携によるJA広島ゆたか(広島県)の「大長レモン」周年販売。第4回(3月18日号)は、ICTを活用したJAめむろ(北海道)の効率的な小麦収穫を取り上げました。誌面(PDF)は『月刊JA』のHPからもご覧いただけます。

テレビ地上波で特番を放送 JA職員の奮闘を紹介しました

JAで働く職員の“頑張り”を紹介する『メルクリウスの扉』を3月

10日(16時~17時15分)テレビ東京系列で放送しました。

番組では「働き一マン」と称して、地域に活力をもたらす4人のJA職員を取り上げ、一人一人の働きが組合員の幸せにつながることを伝えました。視聴者に、同じ働く者として、悩み、苦しみながらも懸命に頑張る姿に共感してもらうことを目指しました。

攻めの営農指導でおいしいイチゴを目指すJA南三陸(宮城県)の宮岡茜さん。農園付き賃貸住宅で地域農業と組合員の農地を守るJAぎふ(岐阜県)の村下直史さん。地元の農産物を活用したメニューで直売所を支えるJAおうみ富士(滋賀県)の今西昌子さん。積極的に新規就農の受け入れを行うJAかいふ(徳島県)の奥村航さんを紹介しました。